

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第18号 2016年6月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP(最新号とバックナンバーを公開中)
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 「佐藤秀夫文庫」	松嶋 哲哉	2
逸話と世評で綴る女子教育史(18) A6番女学校とカロザース夫人	神辺 靖光	5
私の読書ノート、つれづれ3 一本との出会いを求めて一	谷本 宗生	8
近代日本における大学予備教育の研究⑩ 一神戸商業大学予科の学科課程一	山本 剛	11
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(18) 学校沿革史にみる補習科・専攻科(14):鳥取県(1)	吉野 剛弘	15
大阪市の女子教育⑨ 一西区女子手芸学校と府立高等女学校の比較一	徳山 倫子	20
東帝国大学農科大学(学部)実科の独立運動 一校長問題と教官問題一	松嶋 哲哉	24
学生寮の時代⑨ 一正岡子規と「県人寮」一	金澤 冬樹	28
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑤ 女子英学塾の教育内容②	ママトクロヴァ・ニル ファル	33
福島県尋常中学校の出京病について	小宮山 道夫	37
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか(16) 一東京府尋常中学学友会雑誌にみる生徒の言説(その4)一	富岡 勝	42
刊行要項(2015年6月15日現在)		45
編集後記		46

コラム
「佐藤秀夫文庫」

まつしま てつや
松嶋 哲哉
(日本大学 研究員)

日本大学文理学部教育学科には、佐藤秀夫が残した資料が保存されている。通称、「佐藤秀夫文庫」と呼んでいる。佐藤文庫は、小野雅章(現日本大学教授)・富士原雅弘(現東海大学准教授)によって整理が行われた。本来であれば、彼らが佐藤文庫を紹介するべきかもしれないが、本誌の同人として筆者がごく簡

単に佐藤文庫を紹介することとした。

佐藤秀夫が、教育史研究に与えた影響は筆者が説明するまでもない。佐藤は、1965年から国立教育研究所員として、『日本近代教育百年史』の編纂、その他多くの資料の調査・収集と資料集の編纂に尽力した。その後、1991年、日本大学文理学部教育学科教授に着任し、教育史研究を主導したが、2002年、68歳で鬼籍に入られた¹。

佐藤秀夫が残した資料群が日大教育学科で保管されることとなったのは、佐藤が残した大量の書籍と資料の体系的な保存を望む声があがったためであるといわれている。そこで、この貴重な資料群を最終的な勤務先である日大教育学科が受贈することになった。佐藤の残した資料群の受贈にあたり、日大教育学科で日本教育史を専攻している、小野・富士原によって詳細な目録が作成されたのだが、この目録を作成するのに5～6年かかったという。この作業を経て教育学科図書室に資料が移管され、現在に至っている²。

さて、佐藤文庫に残されて資料の概要を紹介したい。佐藤文庫として保存されている資料は、大きく分けて2種類ある。

第一に、佐藤が収集した出版物などの図書である。この資料群は、先に紹介したように小野・富士原によって目録化されているため、全体像が明らかになっている。この目録によれば、11,769点の資料が確認できる。その膨大さにも驚くが、その資料を整理し、目録化した小野と富士原の苦勞には頭が上がらない。



佐藤秀夫文庫

佐藤が収集した出版物の目録をながめてみると、収集されている出版物が教育関係に限らず、人文・社会科学と広範なものが収集されていることに驚く。まさに、佐藤の研究視点をながめているかのようなのである。たとえば、『大塚製靴百年史』、『丸善百年史』といった蔵書からは、佐藤が「もの」や「こと」に注目し、文化史の視点を見いだしていったことの足跡を思い起こさせる。

また、このような出版物の中には、佐藤の思索のあとが見られるものがある。例えば、右写真は、佐藤が『日本教育史研究』に執筆した書評の際に使用した図書と考えられるものである。この図書には、佐藤がつけた付箋やアンダーラインとともに、佐藤の書き込みが残っている。書き込みには、「？」といった単純のものから、「当然」、「当たり前!」、「これ自体が矛盾イデオロギー」といった手厳しいものが見られる。これらの図書は、佐藤が書評の際、どこに注目し、何を考えていたのかが追体験できる点で貴重である。

一方で、このような出版物の資料群には、佐藤が直接古書店を通じて収集したと思われる史資料も残されている。例えば、宮内省『幼学綱要 卷之一～卷之七』（1882刻成）といったものから、福島県安達郡本宮町立本宮中学校「学校家庭連絡簿」（不詳）などと言った史資料が多く残されている。戦前に出版されたもので、出版年が判明しているものだけでも約900点も残されている。これらの史資料だけでもその価値は大きい。

もう一つの資料群は、佐藤の私文書などを含む膨大な書類である。この資料群は、佐藤が収集した史料のコピー、自著の原稿、論文のコピー、学会のレジュメなどまさに「雑多」なものが残されている。残念ながらこの資料群はまだ整理されておらず、目録化もされていないため、どのような資料が残っているのか全体像が判明できていない。

そこで、ここではこの資料群に残されているもので、筆者が「探索」した際に気がついたものを2点簡単に紹介したい。



佐藤文庫（出版物など）



付箋の付いた書

ひとつめは、この資料群には佐藤が著した原稿が残されていることである。全ての原稿が残されているのか不明ではあるが、一部の原稿は確認できる。例えば「いまこそ歴史の封印を解くとき——「君が代」「日の丸」、日本近現代を”しるし”するもの」(初出は藤本卓編『公論よ起これ! 「日の丸・君が代」』「ひと」別冊、太郎次郎者、1997年7月)の原稿には、佐藤による校正のあとが残っている。



佐藤文庫(私文書など)

ふたつめは、この資料群には、佐藤が収集した史料のコピーも大量に残されていることである。残念ながら、無造作に保管されているため、出典を追うことができない。しかし、佐藤が収集した史料のコピーは多く見つかり、この中には「新史料があるのではないか」といった気持ちが起こってくるほどである。

以上、ごく簡単にではあるが、佐藤文庫に残されている資料を紹介した。このような、佐藤文庫は二重の意味で貴重な資料を保管している。それは、佐藤文庫に貴重な史資料が保存されていること、佐藤秀夫その人に関する一次資料をまとめて保管していることである。佐藤秀夫は、日本の教育史学を考えるうえで欠かせない人物である。今後、学説史研究などが進むとともに、佐藤秀夫その人も研究される日が来るであろう。

本コラムは、上述の佐藤文庫が日大教育学科に残されていることを紹介した。このような佐藤文庫が、貴重であり今後も保存されるべきことは多くの読者に賛同していただけるのではないだろうか。そして、佐藤秀夫その人が研究対象となるとき、佐藤文庫が活用される日が来ることを願い、今後も佐藤文庫の保存へ向けた調査・整理・活動を行っていきたい。

※現在、佐藤文庫は一般公開されていない。

¹ 佐藤秀夫の年譜・著作目録は『教育の文化史4——現代の視座』(阿吽社、2005年)にまとめられている。

² 日本大学文理学部に移管するにあたって、佐藤自身の著作はご自宅書斎に残した。

***このコラムでは、読者の方からの投稿もお待ちしています。**

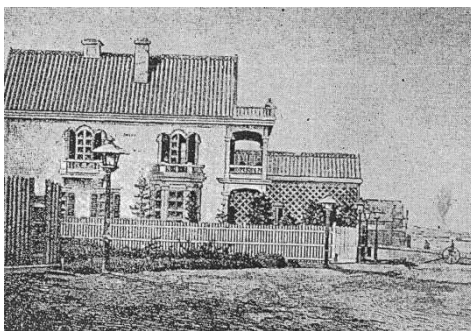
逸話と世評で綴る女子教育史(18)

A6番女学校とカロザース夫人

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

明治2年、アメリカ長老教会の宣教師カロザースCarrothers夫妻が来日し、3年6月東京築地の外国人居留地6番区を同僚のタムソンD.Tompsonと借りた。6番区を二分し、海側をA6番と名づけてC.カロザースのものとし、奥をB6番としてタムソンが借り受け、建物をたてた。カロザースの家をA6番館と言い、タムソンのものをB6番館という。

外国人居留地は日米修好通商条約にもとづく五港の開港と大坂、江戸の開市によって設けられたものであるが、幕末の動乱と維新政変のため遅れて、明治元年11月に、やっとでき上がった。このあたり幕末には大名の中屋敷が居並んでいた。現聖路加国際病院があるあたりは中津藩奥平家の屋敷が



築地 A6 番館

あって福澤諭吉の慶應義塾が呱呱の声を上げたところである。維新の変革で、大名は屋敷からどいたので、横浜居留地のように整地する世話もなく、区画するだけで外国人に貸し与えた。はずれではあるが東京市街の中である。しかし貿易港横浜は遠い。貿易商人は集まらなかった。新政府は御雇教師として外国人を雇用するが、彼らは宿舍をあてがわれるから築地居留地にはあまりこない。結局、布教のための宣教師がここに集った。カロザース入居の後であるが、キリスト教各派の宣教師が次々ここに来て、彼らの学校をつくった。後の立教大学の発祥・立教学院、青山学院大学になる耕教学舎、同じく海岸女学校、明治学院大学になる明治学院はみな、この築地居留地ではまったのである。

明治3年夏、居留地のA6番館に入ったCカロザースは、そこでバイブルを講じた。彼はシカゴ大学出身の熱烈な宣教師で、A6番館は祈祷所＝教会ともなり、バイブルを読む英語塾のようでもあった。いまだ禁教中であつたが、そんなことは眼中になかつた。明治6年春、彼は近くの入舟町にキリスト教の築地大学を創立した。これは前に述べた明治13年創立のバラ学校に続く築地大学校(本連載(15)参照)とは別のものである。

禁教中ではあつたが、そこは文明開化の発信地・東京である。キリスト教に名をよせた西洋文化であれ、欲しいものは欲しい。維新の激変で封建体制の馬鹿らしさを感じ取つた若者は競つて、ここに集つた。キリスト教者の田村直臣、免囚保護で名をなした原胤昭その他の名士が、ここから輩出した。当時、東京の私塾は男女の区別がはっきりしなかつた。男子ばかりの私塾に女子がいたり、女学校と銘打つ私塾が男子生徒を募集することもあつた。しかし一般に女学生は少なく、めずらしい存在であつたから、私塾に通う女子は服装を地味にし、黒っぽい着物を着たものである。エビ茶式部と言われた明るい美しい着物を着るのは後年のことである。ある日、ここに男装して通つた少女が、女性であることを隠しきれず、黒板にI am a girlと大書した。これは本連載(1)ですでに書いたことであるが、これが一つの契機にもなつて、カロザース夫人が女子だけのクラスを作ることになつた。通常、A6番女学校というのは、このカロザース夫人の私塾である。

A6番女学校には40名ほどの生徒がいたといわれるが、カロザース夫人のここでの教育活動についての記録は殆んどない。フェリス女学校のように教会本部からの資金援助のない個人経営の私塾で、教則もなく、夫人の好意と熱意だけで個人教授を続けたのであろう。カロザース夫人は近くの万年橋際にできた上田女学校、通称万年橋女学校に教員として雇われた。



ミセス・カロゾルス

上田女学校は明治5年に外務省出仕の上田峻がたてたものである。本連載(9)(10)の開拓使女子留学生で、健康上の問題で早く帰国した上田梯子の父である。上田女学校は評判のよい女学校であったが、それはカロザース夫人の功績によるものである。5年10月の「各種新聞要録」は次のように伝えている。

築地万年橋の女学校建築落成し、去年中旬開校に及び追日入学せる者有之由、余此頃往て一見せるに学堂清潔規則も亦頗る厳整なり。教師は米国カルロザル氏の細君にして其学問教授極めて親切丁寧なるハ論なく亦其余女業の世話も能く行届けり。世間私学私塾多けれ共、皆男子の為に設くる者なれば、偶女子の学に志す者有るも止む得ず日を過せる事少なからず、今此学校は私設女学校の冠首共云ふ可き^{まさ}真しく盛世の美事なり。

本連載(3)に書いた青山千世も、この上田女学校に入学したが「入学第1日、おそろしく日本語のうまいカロザース夫人というアメリカの先生から地球儀を見せられて日本の位置や地球の自転の話をきいたときは、はじめて目のあいためくらのように、一生忘れえぬ感激にうたれました」と述べている(『おんな二代の記』)。

明治9年、Cカロザースは文部省御雇教師になって官立広島英語学校に行くことになった。ために築地大学校もカロザース夫人のA6番女学校も閉ざされた。A6番女学校の生徒は後に述べる原女学校に移された。

【参考文献】

会田倉吉「カロザースの事績」

『女子学院の歴史』

都市紀要4『築地居留地』

私の読書ノート、つれづれ3

一本との出会いを求めてー

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

本との出会い、自分の読書の在りかたをみつめるのに適した文献を、いくつか本稿では紹介してみたいと思う。最初の1冊は、アレックス・ジョンソン著『世界の不思議な図書館』(2016年4月、全239頁)である。著者のアレックス・ジョンソンは、英国のジャーナリストであるという。同書の主な目次は、次のとおり。1)旅先の図書館、2)動物図書館、3)小さな図書館、4)大きな図書館、5)ホームライブラリー、6)移動する図書館、7)意外な場所の図書館、である。なかでも印象的なのは、1)旅先の図書館で挙げられているスペインカタルーニャ州のビブリオトレン(電子図書館列車)で、10両ある客車の窓におススメ本のQRコードが示されていて、乗降客らが自身の携帯するスマートフォンでそれを読み取れば、容易に本が読めるしくみ(試験的導入)であるという。たとえ旅先や移動中でも、何気ない本との出会いがあれば直ぐ簡単に読書できるシステムなのであろう。同様にニューヨーク市の地下鉄でも、列車内に掲げられている本のポスターSwipe for a FREE readに携帯するスマートフォンをかざすだけで、自分が気に入りたいと思う本の最初頁を読むことができる。そして、その書籍が所蔵されている最寄りの図書館を示す地図も送信されるしくみである。驚。いずれも、選択ツール媒体が広がりを見せていく現代人にとっての読書スタイルといえるだろう。続く2冊めも、同著による『本棚の本』(2012年3月、全272頁)である。読書する行為や本自体への拘りを、古今東西のユニークな本棚から著者はモンテーニュのごとく考察する。著者は「現在起きている本箱デザインの新しいルネッサンスは、本がコンピュータに吸い込まれ(音楽がそうであったように)、ボタン一押しで登場する媒体になってしまう前のフィナーレに過ぎないのだろうか?」(10頁)と疑問を

投げかけながら、「本の保管の定義は、環境に調和した形で本を愛蔵するという方向へ変わっていくのかもしれない。」(同頁)と述べている。さらに、「多くの読者にとって、本棚は蔵書と同じくらい重要だろう。わたしは子どものときに使っていた本箱の大きさ、形、匂いをまだ覚えており、そこにしまわれていた小象のマンフィー、ジェニングス、タンタン、ポケットサイズの百科事典『オブザーバーズ』などの本と同じくらい懐かしさを感じる。…こうした書庫は、感情の聖域なのだ。…読書家は、お気に入りの蔵書にすてきな家を与え、遊んだり、収納したり、並べ替えたりしたいと願っている。子ども時代、わたしはモーリス・セダックの『ナットシェル・ライブラリー』が大好きだった。アルファベットの本、『チキン・スープ・ウィズ・ライス』という名の月ごとの遊び歌の本、数え方の本、訓話の本の4冊セットを箱に入れたものだ。4冊の本を読むのも楽しかったし、本を箱から取りだしては正しい順序に並べて戻すのも好きだった。大人になった今は、これを幼い我が子たちと共有することを楽しんでいる。…本棚は、しぶとく生き残り続けるのだ。」(12～13頁)と述べている。なかでも象徴的な本棚は、Tree Bookshelf(150×20×210cm)である。デザイナーのシャウン・ソーは、幼き日手紙に木の枝を刺した思い出から緑色のTree Bookshelfを着想したという。「紙に加工されて本になった木が、この本棚で木に回帰する。本は花として木に咲き、毎日使われる作品の一部となる」(230頁)としている。我われ現代人にとって、本という生産物・加工物の意味をあらためて考えるよい機会であろう。

3冊めは、世界の図書館再発見委員会編『死ぬまでに行きたい世界の図書館』(2015年12月、全129頁)である。同書では、世界中にある歴史あるまたは最新の素敵な図書館や書店がふんだんに紹介されている。「一生に一度は見ておきたい」図書館として挙げられるのは、ゴシック様式の英国オックスフォード大学ボドリアン図書館(1602年創立)にあるハンフリー公図書館である。映画「ハリー・ポッター」で、主人公ハリー・ポッターらが学ぶホグワーツ魔法魔術学校の図書室ロケ舞台としても知られる。実際に歴史ある重

厚な知の空間が、まさに魔法の禁書を探し出すという幻想的なハリー・ポッターの世界ともマッチしたといえるだろう。他に同書では、「好きな物への愛が詰まった暖かく穏やかな古書店」の1つとして、英国のバター・ブックス（1991年創業）を挙げている。所在地はかつて英国の鉄鋼鉄道駅アニックとして栄えながらも、路線整備にともない1968年に廃駅となったという。鉄道と本を愛するオーナーのマンリー夫妻が、旧駅舎の一角に古書店をオープンさせる。バター（交換）・ブックスと名付けられた古書店では、現金販売はもちろん、客自身が持ち込んだ本を同価値とされる商品と物々交換するシステムである。旧駅舎時代の待合室は今や店の読書室に変わり、本棚の上にはミニチュア模型の汽車が走るという光景で、オーナー夫妻の暖かい愛情を感じる空間となっている。さらに同書では、「客との信頼関係で成り立つ」最大級の常設屋外書店として、米国のバートズブックス（1964年創業）を挙げている。ロサンゼルスから車で2時間ほどにあるオーハイにオープンしたバートズブックスは、歩道沿いに本棚を並べ、無人のレジで代金を空き缶に入れる方式や持ち込み本3冊とお店の本1冊との交換方式など、独自スタイルを追求する書店として知られる。店の看板にも「営業時間は朝9時半から日没まで」と掲げられ、気軽にお好きな本をどうぞ選んで!といった肩肘張らない店の雰囲気、読書好きにはなんとも粹に感じてしまう。本との姿勢を再考するには、よい場所かな。

近代日本における大学予備教育の研究⑱

—神戸商業大学予科の学科課程—

やまもと たけし
山本 剛 (早稲田大学大学史資料センター)

はじめに

神戸商大予科は、1939(昭和14)年に予算が閣議で承認され、1940(昭和15)年に設置が認められた。

本号では、引き続き『公文類聚』所収の関係文書を検討し、同大学予科がどのような学科課程編成であったのかを考察する¹。

1 大学予科の学科課程

上記の文書には、前号で検討した「神戸商業大学予科設置趣意書」のほかに同大学予科の学科課程表が掲載されている。また、「学科課程(案)の説明」として、①「教育方針」、②「学科課程の達成」、③「予科教育の特色」と明記された文書がある。このうち②「学科課程の達成」によれば、学科目を「一般学科」、「特殊学科」及び「鍛錬科」と分けて、次のように説明している。すなわち、「一般学科」は、「高等学校文科の課程に準じて学科目を配置し、一般的教養の完成を期すると共に大学教育の基礎たらしむるもの」とする。さらに語学については、「英語を共通必修科目とし、選択必修科目として支那語、独逸語、仏蘭西語を加える」。次に「特殊学科」として「商学概論、工業概論、商業数学、簿記及び統計学」を配置し、「大学に於ける基礎的知識を与え以て予科及び大学を通ずる一貫教育の徹底に資す」と記されている。最後の「鍛錬科」は、「体操、教練、武道を正課として之に相当時数を配置して、「寮に於ける日常生活を通じて心身の鍛錬を期し、更に夏期訓練、支那満州等海外鍛錬旅行を実施し、以て強健たる身体と国民的自覚に透徹せる人物の錬成に留意する」と記している。学科目は以下のようであった。

神戸商業大学予科の学科目

一般学科：修身、国語漢文、英語、独語・仏語・支那語、歴史、地理、哲学

概論、心理論理、法制経済、数学、自然科学

特殊学科：商学概論、工学概論、商業数学、簿記、統計学

鍛錬科：体操、教練、武道

このように神戸商大予科の学科課程は、旧制高校文科のそれに準じながら、一方で大学教育のための「特殊学科」を配置するものであった。

また『公文類聚』所収の関係文書には「学科課程比較図表」として、神戸商大予科、高等学校高等科文科、兵庫県立神戸高等商業学校に設置されているそれぞれの学科目を「一般学科」、「特殊学科」、「鍛錬科(体操)」に分けて、学年ごとの合計毎週時間数を比較している文書がある²。次の表は、この「学科課程比較図表」である。なお、これも上記と同じように「一般学科」は、「修身、国語、地理、歴史等の一般教養学科」、「特殊学科」は、「商業教育に必要な専門学科」、「鍛錬科」は「体操、武道等の心身鍛錬学科目」を示している。

表 学科課程比較図(旧制高校文科・神戸商大予科・兵庫県立神戸高等商業学校)

	一般学科			特殊学科			鍛錬科		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
高等学校 高等科文 科	30	30	29				3	3	3
神戸商業 大学予科	29	27	19		2	10	5	5	5
兵庫県立 神戸高等 商業学校	13	9	8	13	23	22	3	3	3

【合計毎週時間数】

〔註〕「学科課程比較図表」『公文類聚』第六十四編、昭和十五年、第十三巻から筆者作成。

このような「学科課程比較図」から、神戸商大予科が学科目を配置する際に、旧制高校と高等商業学校のそれを考慮したうえで、学科課程編成をおこなったことが窺える³。

いずれにせよ神戸商大予科は、先(本レター11号)に検討した東京商科大学予科と同様に「一般学科」に加えて、商業系大学のための準備教育である「特殊学科」が配置されていたのである。

以上のように、神戸商大予科では、「一般学科」のほかに、商業系大学として、「年少」の間に履修を必要とする「簿記」や「統計学」等の商業学のための基礎学科目を配置した⁴。それは、学部教育のための基礎学科目として、大学予科に設置することが必要であるとされたのである。

おわりに

以上、これまで本レター(12号～)では神戸商大が、どのような理由から大学予科設置を要望し、またその大学予科ではどのような大学予備教育が意図されたのかを検討してきた。さらに、同大学の論議のなかで他大学は大学予科をどのように捉えていたのかについて、その一端を確認した。

神戸商大予科内容に関しては、本レターで考察した通りであるが、とりわけ同大学が大学予科設置の理由として、旧制高校と高等商業学校の学科課程では、商業大学の準備教育として不充分であると指摘したことは、商業系大学の大学予備教育における教育内容の特質を明らかにする意味で注目すべき点であると言える。それでは、こうした商業教育に関する準備教育の考えは、他の商業系大学ではどうであったのだろうか。すでに本レターでも指摘したように東京商科大学の学長佐野善作は商業大学の予備教育には旧制高校の学科課程が不充分であると指摘していた。さらに同大学では、1931(昭和6)年に起きた同大学予科廃止案をめぐる一連の反対運動の際に、商業大学には独自の準備教育が必要であり、旧制高校と高等商業学校では準備教育として適切ではないという神戸商大と同様の論拠をあげて反論

した⁵。すなわち商業系大学には予備教育で修得すべき学科目があるのであり、それが両大学の大学予科存立の根拠であったのである。

¹「官立商業大学官制中ヲ改正ス」『公文類聚』第六十四編、昭和十五年、第十三卷、国立公文書館所蔵。

²「附表二、学科課程比較図表」『公文類聚』第六十四編、昭和十五年、第十三卷、国立公文書館所蔵。

³なお、神戸大学文書史料室所蔵の文書には、「学科課程(案)」と明記された文書があり、大学予科学科課程の授業時間数の横に、朱印で「高等学校規程」の授業時間数が明記されている。このように「一般学科」の授業時間数を比較している跡が窺える。

⁴「神戸商業大学予科設置ニ関スル意見」[複写版]神戸大学文書史料室所蔵。

⁵1931(昭和6)年10月2日付「廃止案反対理由書」『一橋新聞』1931年10月5日。詳細は『一橋籠城事件(昭和六年十月)』(一橋大学学園史編纂事業委員会、1982年)を参照。

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(18)

学校沿革史にみる補習科・専攻科(14):鳥取県(1)

よしの たけひろ
吉野 剛弘(東京電機大学)

今号からは、鳥取県の専攻科について検討していく。これまでに検討した福岡県や島根県の事例と決定的に異なるのは、鳥取県では補習科ではなく、学校教育法に規定される専攻科を設置したことである(専攻科と補習科の相違については、第4号の記事を参照されたい)。

法令上の規定がある、すなわちアンダーグラウンドな存在ではないこともあり、鳥取県の専攻科についての情報はそれ相応に多い。学校沿革史もさることながら、学校の年次報告といった公的な資料でもその実態が語られることになる。具体的には、鳥取東高等学校の『柏葉』、倉吉東高等学校の『鴨水』には、各年の専攻科に関する項目が独自に設定されている。

さらにいえば、これまでも研究対象として取り上げられてきた。浜田英一「鳥取県立高等学校専攻科30年の歩み」『研究紀要』第26号(1990)(以下、今号では論文①と省略)、平木耕平「公立高校専攻科・補習科からみた〈地方からの大学進学〉—鳥取県を中心とした政治社会学的考察」『教育社会学研究』第83集(2008)(同上、論文②)が、比較的詳細に鳥取県の専攻科を検討している。そこで、今号では、上記の2つの研究と、学校沿革史をもとに、鳥取県における専攻科の歴史を概略する。

まずは、鳥取県における専攻科の歩みを、年表形式で整理する。

1955(昭和30)年 県立鳥取東高等学校に浪人学級の設置

1958(昭和33)年 石破二郎知事当選

1959(昭和34)年 県立鳥取東高等学校に専攻科設置(1学級)

1960(昭和35)年 県立米子東高等学校に専攻科設置(1学級)

1961(昭和36)年 県立倉吉東高等学校に専攻科設置(1学級)

1966(昭和41)年 鳥取東、米子東の専攻科を2学級に
1967(昭和42)年 倉吉東の専攻科を2学級に
1973(昭和48)年 私立米子北高等学校に専攻科設置
1976(昭和51)年 私立鳥取城北高等学校に専攻科設置
1994(平成6)年 米子北、専攻科募集停止
2004(平成16)年 鳥取城北、専攻科閉科
2009(平成21)年 鳥取東、専攻科閉科
2013(平成25)年 米子東、倉吉東、専攻科閉科
倉吉鴨水館開館(運営:NPO法人倉吉鴨水館)

この系譜からは、以下のような特徴を見いだせる。第一に、自主的な浪人教室を経て、公的な専攻科という流れがあることである。第二に、県政の転換が専攻科設置への転換点になっていることである。第三に、公立学校で拡大していった上に、私立学校にも設置されたということである。

なお、私立高等学校の専攻科というのは、鳥取県のみに見られたわけではない。広島県の修道高等学校にも1956(昭和31)年から設置されていた(廃止年は現段階では不明)。広島県の動向については、後の機会に触れることにしたい。

今号では、上述の三つの特徴のうち、第一と第二の点について詳述していく(以下、特に断らない限り、論文①, pp.44-45)。

鳥取東高等学校の浪人学級は、1955(昭和30)年4月から始まった。開設の契機は、浪人生から母校の授業を聴講したい、あるいはわからない点を質問したいという申し出に、教員側が応えたことである。浪人学級は、毎週木曜日の午後と日曜日の午前中を中心に数学と英語を指導した。講師は、数学が早田・井上各教諭、英語が三浦・山下各教諭が担当し、参加者は10数名であった。あくまで教員の善意として行われ、プリント代以外は徴収しなかったという。

そのような中で、建設事務次官から鳥取県知事に当選したのが、石破次

朗であった。当時、県教委の高校教育課長をしていた西本真一の語るところによれば、「石破知事は人材を育てねばならないとして、英才の養成のための施策として、鳥取県育英奨学資金と、専攻科の設置を大きな柱としてかかげた」という。石破の知事就任は1958(昭和33)年12月3日ことだが、早くも同月に県教委は東部、中部、西部の各地区に1か所ずつ専攻科を設置する方針を立てた。

しかし、順風満帆に事が運んだわけではない。そもそも受験対策の課程をして専攻科という名称にすることは法律上なじまないとして文部省は難色を示していたからである(学校教育法の当該規定の解釈については、別の機会に改めて論じることにしたい)。結局のところ、県教委は専攻科にふさわしい教育課程を作った上で、管理課と共同歩調を取って文部省に陳情、折衝を行い、最終的に設置をみたのだという。

この設置までの経緯について、論文②では、石破知事(鳥取一中から東京帝大を卒業し、内務官僚を務めた石破知事と、当時文部省にいた河上邦治(鳥取一中から台北帝大卒)の存在が、専攻科の設置を円滑にしたと考えられるとしている。ただし、その点が実証されているわけではない。

さらに論文②では、「優秀な若者を中央省庁や大企業へ送りこみ、補助金や企業誘致といったかたちで地元還元させる——それは高度経済成長に沸く日本のなかで、文字どおり陽の当たらなかつた「山陰」の弱小県の不利条件を痛感していた教育現場や知事・行政担当者が編み出した、必死の「サバイバル・ストラテジー」であった」(p.114)、と結論付けている。この点は、入学者選抜や目指された進学先にも反映されているとも指摘しているが、この点は次々号以降で検討する。

つまり、鳥取県の専攻科は、鳥取県の後進性を背景に、県当局(含・県教委)の強力な政治力によって実現したということである。この点は、同じく専攻科の設置を模索しながらも失敗に終わった島根県と対照的である。しかも、島根県の専攻科設置運動は、鳥取県よりも後発である。鳥取県という成功例がありながら、島根県が失敗に終わるということは、鳥取県における専攻

科設置運動が、政治的に巧妙に練られていたことをも示している。しかし、専攻科設置そのものの過程は、沿革史では詳しく語られていない。この政治過程の検討は、他日に期したい。

専攻科設置に難色を示したのは、文部省だけではなかった。設置の暁には実際に運営に携わらねばならない教員にも異論はあった。教職員組合は、専攻科の設置に反対の立場をとっていたのである。「高等教育の正常化」を求めていた組合側にとって、エリート主義の復活ともいえる専攻科の存在は、到底認めがたいことは想像に難くない。

多くの教員が専攻科主任を引き受けることを断る中で、鳥取東高等学校の初代専攻科主任に就いたA氏(論文①によれば横川芳彦教諭)は、以下のように語っている。

間違つとるかもしれんけど、やらなあいけん。仕方ない。このまあいったら鳥取は取り残されるけえ。わしも本当は反対だったけど、そんなわしが主任をやって……。 (論文②, p.114)

このような思いは、A氏ひとりのものではなかったようである。専攻科を設置した当時、倉吉東高等学校の校長を務めていた小林俊治は、以下のように記している。

三高校(鳥取東、米子東、倉吉東の各高等学校・引用者注)に設置されている専攻科もちろんこの条文(学校教育法第48条・引用者注)に基づき、英語・国語・数学・理科・社会の各教科について、精深な程度においてこれを研究させることを目的としているが、本件の場合端的に言えば、大学受験指導がその目的である。

当初、上記の目的の専攻科の設置については教員組合側に異議があり、簡単に設置の決定をみることが出来なかったが、数回にわたる研究会の結果設置に踏み切ることになり、初年度は試験的に東部地区の

高校浪人のために、鳥取東高校に設置されることになった。その結果は、心配された弊害もなく大学合格も好成績であったので、次年度には西部地区高校浪人のために米子東高校にも設置されたのである。

(中略)

爾来、倉吉東高校の専攻科は、手嶋校長以下各先生の適切な指導の下に所期の目的を十分に果たされていることは喜びに堪えない。今後の発展を祈ると共に、高校浪人の無い、したがって専攻科不要の時代の日も早からんことも併せて念願している次第である。(創立六十年記念誌編集委員会編『創立六十年誌』(鳥取県立倉吉東高等学校, 1968), pp.213-214)

大学進学実績の向上という目的は理解しながらも、決して専攻科は無条件で歓迎されるものではないということである。県教委に比較的近い立場にあると想像される校長経験者が、「専攻科不要の時代が一日も早からんことも併せて念願している」のである。しかも、この言は、専攻科が1学級から2学級に拡大される時期に繰り出されたものでもある。現場においては、大学進学実績の向上と高等学校としてのあるべき姿の間で苦悩していたのである。

しかし、結果として、専攻科はその規模を拡大させ、私立学校にまで波及する。次号はその点について検討していくことにする。

大阪市の女子教育⑨

—西区女子手芸学校と府立高等女学校の比較—

とくやま りんこ
 徳山 倫子(京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員DC)

今回は、西区女子手芸学校の教員が同校と府立高等女学校の差異をどのように認識していたかを検討する。

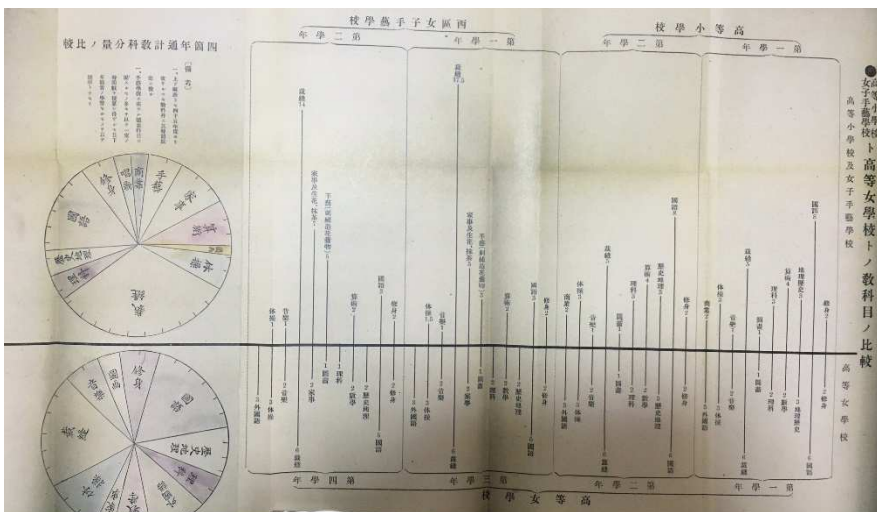


写真 1: 「高等小学校女子手芸学校ト高等女学校トノ教科目ノ比較」

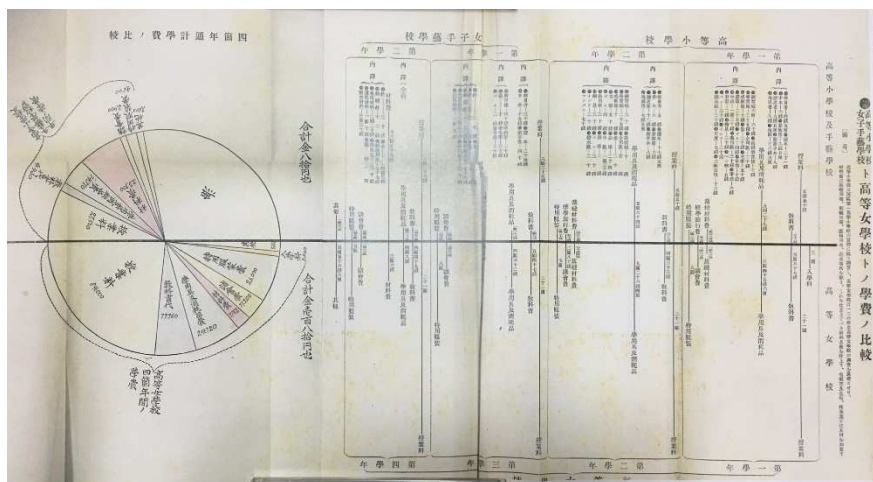


写真 2: 「高等女学校女子手芸学校ト高等女学校トノ学費ノ比較」

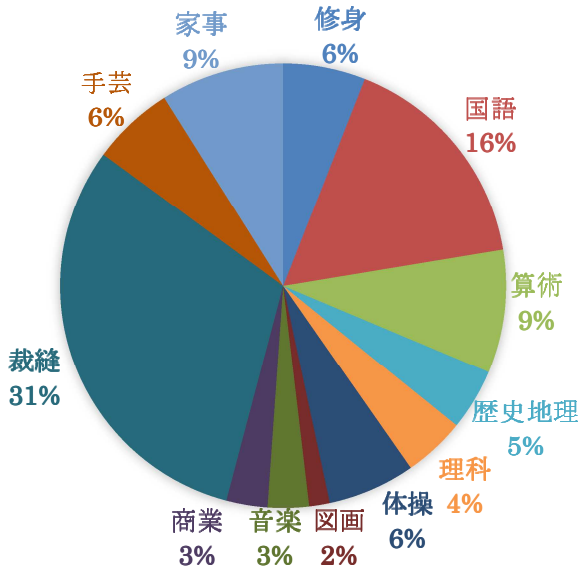
写真1と写真2は『西区第一高等小学校西区女子手芸学校一覧』(1912年・推定)に挟み込まれていたものである。写真1は「高等小学校女子手芸学校ト高等女学校トノ教科目ノ比較」、写真2は「高等女学校女子手芸学校ト高等女学校トノ学費ノ比較」と題されており、高等小学校2年+女子手芸学校2年と4年制高等女学校における教科目と学費の比較がなされている。比較対象となった高等女学校の校名は定かではないが、「一二の府立高等女学校の調査を基礎とせり」と記述されていることから、府立高等女学校が念頭に置かれていたことが判る。また、西区女子手芸学校では希望者のみ受講する科目が多数存在したが、「目下多数者ノ学習セルモノヲ以テ標準」として作成された。

両史料においては、各学年における詳細な授業時数・学費が記されるとともに丁寧に色付けされた円グラフが付されている。図は写真1の内容を表したものである。この図からは、高等小学校2年+女子手芸学校2年では46%が「裁縫」・「手芸」・「家事」の教授に費やされ全体の約半分を占めた一方で、高等女学校では「裁縫」・「家事」の時数の割合は23%と約4分の1であり、前者の方が女子特有の科目に多くの時数が割かれていたことが判る。ただし、高等小学校では普通科目の教授に多くの時数が費やされていたため、これらの科目は女子手芸学校に入学してから集中的に教授されていた。また、高等女学校では「外国語」の教授に10%の時数が費やされていたが、高等小学校2年+女子手芸学校2年では教授されていなかったことも大きな違いであると言えるだろう。

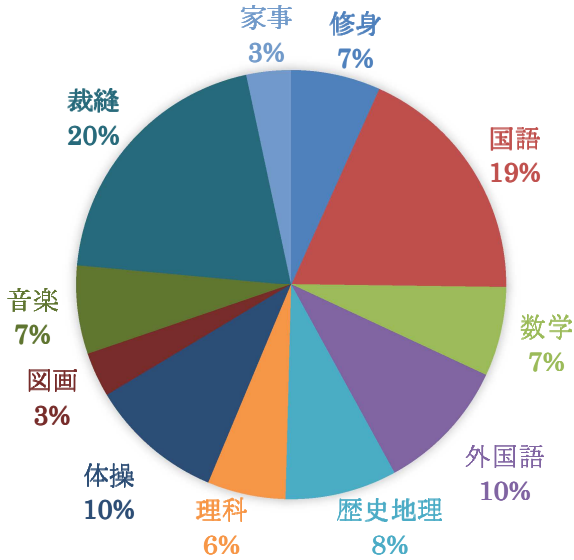
表は写真2の円グラフの内容をまとめたものである。高等小学校2年+女子手芸学校2年において学費の合計は80円余り、4年制高等女学校では180円余りとされており、高等小学校2年+女子手芸学校2年に通えば4年制高等女学校の半分以下の学費負担であったようだ。

西区女子手芸学校の教員がこのような手の込んだ資料を作成していた意図はどのようなものであったのだろうか。言い換えれば、同校の教員は何故にここまでして同校の特色を示そうとしたのだろうか。

高等小学校2年+手芸女学校2年



4年制高等女学校



図：授業科目の割合の比較

表：4年間でかかる学費の比較

	高等小学校2年＋女子手芸学校2年	4年制高等女学校
授業料	27,500	84,000
教科書代	4,430	19,960
学用具及消耗品費	14,770	24,720
材料費	23,700	7,152
諸会費	3,400	11,200
特用服装費	4,800	26,000
入学料	0	2,000
其他	2,600	5,565
合計	81,200	180,597

※ 金額は円,銭で表記している。

前回までのニューズレターで検討してきたように、同校は西区内に設置された小学校付設の各種学校(裁縫学校)の中でも生徒の学歴や経済力が相対的に高い学校であった。同校の教員は、同校は他の裁縫学校と高等女学校の間位置づく学校であるという自負を持ち、一般的な裁縫学校とも高等女学校とも異なる独自の教育方針を持つ学校として発展させようとしていたのである。このような気運が大阪市立家政女学校の設置計画を生じさせたのであるが、これについては次回で検討する。

東帝国大学農科大学(学部)実科の独立運動

——校長問題と教官問題——

松嶋 哲哉(日本大学 研究員)

筆者は、これまで東京帝国大学農科大学(学部)実科の独立運動の過程を検討してきた。前号では、1931年実科独立の予算が通過したことを明らかにした。予算が通過すると、実科独立運動は、第2段階する。つまり、校長問題、敷地問題、建物問題、教官問題、演習林の問題などの解決であった¹。

本号では、学校教育に深く係る問題として、校長問題と教官問題に注目したい。殊に、教官問題は、学校の質に係る重要な問題である。実科が東京高等農林学校として独立するにあたって、どのような教員を求めたのかを明らかにしていきたい。

1. 校長問題

1931年、実科独立予算は、東京帝国大学農学部実科建物新営費として通過した。そのため、実科独立の主導権は独立運動を展開してきた駒場校友会ではなく、東京帝国大学が握った。東京帝国大学では、実科の独立に向けて、当時の総長小野塚喜平次が委員会を組織する。しかし、小野塚は積極的に関わったわけではなく、実科独立へ向けた調整は、古在由直(前総長)が中心となり、麻生慶次郎(農学部長)、岩住良治(前農学部長)などによって行われた²。

実科の独立に際して、新たな専門学校の校長には、古在が就任する予定であった。古在は、駒場農学校を卒業したのち、東京農林学校教授、農科大学助教授、同教授、東京帝国大学総長を歴任。農学博士の学位を持つ人物であった。古在は、実科の宇都宮移転問題が起こった際の総長であり、この事件を契機に、実科の独立運動を推進した人物である。駒場校友会としても、実科独立に尽力してきた古在が校長に就任することに異論はなかった。

しかし、1934年、古在由直が死去。それに伴い、新たに校長を選出する必要が出た。新たな校長を選出するにあたって、駒場校友会が候補者を選び、文部省と連絡を取りながら、折衝を行った。だが、校長の選出は難航する。駒場校友会が白羽の矢を立てたのが、試験場長の安藤広太郎であったが、安藤は拒否。次に、石黒忠篤にお願いするも、拒否された。

結局は、第三候補の前農学部長の麻生慶次郎の校長就任が決まり、この問題は解決する。「校友会報告」では、麻生が校長に就任するにあたって「大学教授より我校長となられるには、公私共多大の支障」があったと述懐している³。この「支障」が具体的に何であったのかは分からないが、大学教授が専門学校の校長となることは社会的に何かしらの「支障」があったようである。

2. 教官問題

先に述べた通り、実科独立に向けた調整は、古在ら帝大側がとった。しかし、駒場校友会は、教職員の採用に関して強く意見を主張した。1933年の駒場校友会総会で、原鉄五郎(副会頭)が次のように述べている⁴。

同窓としては実科の歴史と伝統的特徴とを継承し、実科をして我国専門農業教育の大宗たらしむるには同窓中の適任者を相当に多数採用することは、極めて肝要の事であり、又同窓中には其人に乏しからざるを以て、この事を強く主張した。然るに従来に於ける教官は動もれば帝大出身に編重するの傾向あり、現に此時の詮衡に当たつても実科出身者は各科一名位にて沢山であると云ふ様な意見さへあつたので、校友会は此実況を打破すべく大活動を起し、各科別詮衡委員として、農科は原、田、藤巻、渡邊、林科は西大路、永山、北、奥野獣医に於ては中村、近藤の各氏委員となつて夫々人材を厳選して候補者を定め、先づ当面の責任者たるべき麻生博士に折衝を重ね、又大学の各教授等にも、数回に亘つて交渉を遂げたる結果、校友会の希望は大部分容れらるゝに至つたのである。

駒場校友会は、独立に際して、帝大出ではなく、実科の卒業生をもって教職員にあてようとしていた。事実、開校当時の教職員、総計51名の内、帝大卒業生は34人、実科卒業生が11人、その他(不明)が6人となっている⁵。帝大卒業生が多くを占めているが、実科卒業生が「各科一名位にて沢山」というほど少ないわけではないことが明らかである。

駒場校友会は、実科の卒業生の任命を強く要請したのは、「実科の歴史と伝統的特徴とを継承」するためであった。この言葉を率直にはのみこめないが、帝国議会での議論などからは実科の特徴が帝国大学・高等農林学校と比較して実習教育にあることを主張していたことを思い出すと、全くの方便とも考えられない。

ともあれ、東京高等農林学校が持った教育機能を考えるのであれば、上記の教官問題と実際の教育課程などの面を明らかにしなければならない。しかし、それは今後の課題としたい。

おわりに

1935年4月、東京高等農林学校は開校する。同年9月、府中の新校舎に移転。実科は、名実ともに東京高等農林学校として独立する。続いて、同年10月には独立記念祭が挙行された。この式典では、麻生校長、校友会会頭の西大路の祝辞、府中町長の祝辞などを経て、学生一同で、「独立記念祭式歌」と「独立記念祭祝歌」が合唱された閉式となった。この「独立記念祭祝歌」はそれまでの実科独立運動の苦節と実科のアイデンティティとしての歴史性が簡潔に歌われている。最後にこの歌の歌詞を引用して、実科独立の物語を終わりとしたい⁷。

独立記念祭祝歌

作詩・作曲 湯山清

1

見はるかす武蔵野原
水清き多摩のほとり
勇躍の若駒場野に
秀麗の正気凝りて
雄々しくぞ母校は成りぬ
仰げ五十年の栄ある歴史
祝へ新なる独立の門出

2

団結の力により
幾年の宿志遂げて
紅霞の気を吐くところ
爛々の文化の光
燦然と耀く偉業
仰げ五十年の栄ある歴史
祝へ新なる独立の門出

3

弥栄の其の光の
天空に漲るとき
先人の偉業は映えて
そのかみの辛苦を語り
肅然と襟正さしむ
仰げ五十年の栄ある歴史
祝へ新なる独立の門出

4

菊桐の徽章のもと
衝天の意気高く
剛健と進取の気性
一世の輿望を負ひて
光栄の業をし進めむ
仰げ五十年の栄ある歴史
祝へ新なる独立の門出

¹ 駒場校友会編『母校独立記念号』1936年、307頁。

² 同前書、308、318頁。

³ 同前書、321頁。

⁴ 同前書、322-323頁。

⁵ 同前書、323-326頁。ここには、1936年時点での講師が、職名、芳名、学位、卒業校(卒業年度)、略歴、担任でまとめられている。

⁶ 拙論「東京帝国大学のか大学(学部)実科の独立運動——帝国議会への請願運動②」『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』(第15号、2016年3月)を参照。

⁷ 前掲書『母校独立記念号』333-334頁。

「学生寮の時代」⑨

—正岡子規と「県人寮」—

かなざわ 金澤 ふゆき 冬樹(東京理科大学職員)

●正岡子規と寄宿舎

寄宿舎の窓にきたなき蒲団哉 子規¹

正岡子規は、四国松山の地から上京し常磐会寄宿舎に入っている。常磐会寄宿舎は明治20(1887)年に、旧伊予藩主久松家による育英事業の一環として設立された学生寄宿舎。正岡子規は、明治21(1888)年から3年余り入舎していたとされる。

実際、子規の部屋は汚かったらしい。同時期に寄宿舎に入っていた河東碧梧桐によると²、「そこいらに和書洋書の区別もなく、書きかけた紙や、もみかためた反古などが時には足の踏みどころもないやうに散かつてゐた」という。また常磐会寄宿舎では、舎生がそれぞれの部屋を頻繁に訪ね合ったり、寄宿舎のすぐ近くにあった広場で毎日のように野球を楽しんでいたそうである。舎生の間では、回覧雑誌も読まれていた。

●常磐会寄宿舎の生活

常磐会寄宿舎の監督では俳人・内藤鳴雪が有名だ。鳴雪は舎生の子規に俳句の教えを受け、近代日本の俳人として名を成した。文部省において高官を務めていた鳴雪であるが、旧藩主久松家より依頼され、明治22(1889)年常磐会寄宿舎の監督に就任している(2年後には文部省を辞め監督専任となっている)³。

鳴雪は、寄宿舎の同じ棟続きに一家を構え、碧梧桐によると「監督と言つても、兄や子規などは半ば友人として交際すると言つた親しい間柄であつ

た」ようである⁴。鳴雪は子規らと俳句会を開くなど親しく交際したり、舎生とともに「遠足会」と称して名所などに足を運んでいる。また茶話会で、舎生の勝田主計(のち蔵相など歴任)が夏期休暇中に行った地方調査の報告を熱心に行っていたことなどを、自伝で振り返っている。

また鳴雪によると、明治末に寄宿舎の改築が行われた頃から、常磐会寄宿舎の様子も変わってきたとしている。

寄宿舎の学生も最初の頃と違って、真面目に勉強する者が少なくなって、どうかすると学問より、父兄から貰う学資を酒代その他に費う者も出来たし、その上年々郷里の松山の中学校を卒業して、出京の上高等学校やその他の専門学校へ入学しようとする者が、一度や二度は、その試験に落第する、その落第者、即ち失望者が寄宿舎へ、転がり込んでいるのだから、いよいよザワザワして真面目に勉強する者が少なくなった。それと共に少数の先輩や真面目に学問する者は多数者に圧迫されて逃げ出る者も段々と出来た。⁵

そして、「改築以前は二十人ばかりを収容するに過ぎなかったのが、改築後間数も多くなったので、倍数の人数となって、その比例的にガヤガヤ生も多くなった」ようである⁶。その後鳴雪は寄宿舎監督を明治40(1907)年ごろに退任し、陸軍中将の秋山好古が後任になっている。

大正初めに発行された「学生寄宿舎評判記」によると⁷、常磐会寄宿舎は「室数二十六、下女部屋から食堂から四十二三畳も敷かる、倶楽部まで合せて三十一」という広さであった。「常磐会の現在は殆んど帝大の学生丈だ、法科八人の文科一人医科一人工科二人、それに、高商六人と各専門学校へ一人位宛、和氣藹々たるもの」とされている。また「評判記」には、「舎生の中から商議員が五人、それが会計庶務図書係に分れ、別に当番食事委員と云ふが有る其れが女中に煮たきをさせる」といった当時の寄宿舎の組織

が紹介されている。

●「県人寮」という存在

以上、関係者の声をもとに常磐会寄宿舎の様子を見てきた。常磐会寄宿舎に限らず、明治時代には各地域の同郷団体により学生寄宿舎が多数設立された。

同郷団体による学生寮については、高田知和による研究がある⁸。高田によると「近代日本においては、修学を一つの契機として地方から都市へと移動する若者たちにとって、同郷団体的な学生寮は実は大きな存在だった」と指摘している⁹。ただここで重要なのは、現在の学生にとっても同郷団体学生寮である「県人寮」が「大きな存在」である点だ。

例えば冒頭に挙げた常磐会寄宿舎であるが、130年近く時代を経た現在も、常盤学舎として存続している。東京都東久留米市にあり、愛媛県出身の学生(大学、大学院、専門学校、予備校生など)が入舎している。他にも、明治時代に愛媛県の同郷団体(旧藩主家の育英事業)によって設立された学生寮がいくつか存続し、上京する学生にとって「大きな存在」であり続けている(【表】¹⁰)。

【表】主な愛媛県の「県人寮」

名称	創立	現在
常盤学舎	明治20(1887)年、旧伊予藩主久松家による育英事業の一環として設立。常磐会寄宿舎。	公益財団法人常盤同郷会が運営。東京都東久留米市。
東予学舎	明治42(1909)年、西条学舎として発足。旧西条藩主松平家の支援。	公益財団法人東予育英会が運営。東京都調布市。
南豫明倫館	明治16(1883)年、旧宇和島藩主伊達家による育英事業の一環として設立。	公益財団法人南豫奨学会が運営。東京都小金井市。

いずれも、地元の支援はもとより、在京の愛媛県出身者や卒寮生の手厚い支援が垣間見られる。懇親会や寮祭、寮独自の部活動、旅行などの行事も豊富で、各寮間の交流も行われている。

●学生寮研究における「県人寮」

学生寮を考えていくに当たり、「県人寮」の存在は無視しえないものである。歴史としても、明治時代に設立された学校(現在の高校や大学)とほぼ同じ長さを持っていると同時に、非常に密接な(相互補完的な)関係にあったことが分かる。そして現在でも、愛媛県の「県人寮」に限らず、多くの都道府県が「県人寮」を設置しており、学生が共同生活を送っている。

しかしながら今日まで、学生寮研究と同様、「県人寮」は総合的・体系的に顧みられることはほとんどなかった¹⁾。今後、学校附設の学生寮の研究と同時に、「県人寮」についても関連づけて検討される必要があるだろう。

¹正岡子規「寒山落木 巻五」『子規全集 第3巻』アルス1925年p254。

²河東碧梧桐『子規を語る』汎文社1934年p33～51。

³内藤鳴雪『鳴雪自叙伝』岩波文庫2002年p299～301。

⁴河東p50～51。

⁵内藤p341～342。

⁶内藤p342。

⁷出口競「学生寄宿舎評判記」『学者町学生町』実業之日本社1917年p228～234。

⁸高田知和は、在京の埼玉県出身有志が県出身学生のために設立した埼玉学生誘掖会寄宿舎(1904年設立)をさまざまな視点から考察している。高田「学生寮の生活史—食と賄方の観点から」日本生活学会『生活学論叢』13号2008年、高田「同郷団体がつくった学生寮におけるスポーツ活動—明治・

大正期における学生スポーツの一つのあり方」スポーツ史学会『スポーツ史研究』25号2012年など。

⁹高田知和「学生寮の生活世界—埼玉学生誘掖会寄宿舎によせて」公益財団法人渋沢栄一記念財団 渋沢資料館『学生寄宿舎の世界と渋沢栄一～埼玉学生誘掖会寄宿舎の誕生～』2010年p5。

¹⁰各寮のホームページの他、寮史などを参照。木下博民『南豫明倫館』財団法人南豫奨学会2003年など。

¹¹もちろん、各寮においては寮史などがまとめられており、非常に重要な蓄積がある。

戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑤

女子英学塾の教育内容②

ママトクロヴァ・ニルファル(早稲田大学)

前号で考察したように、女子英学塾の規則の学科課程表によると、学科目は必修科目と選択科目からなっており、生徒たちは必修科と撰修科でそれぞれを履修していた。必修科目には、英語、英文学、心理学、教育学、教授法など、選択科目には国語、漢文、歴史などがあった。本号では、女性の教養を高めるためにどのような教育や訓練が実行されたかを考察する。

先述のように、津田は女子英学塾において英語・英文学を通して欧米思想を理解させようと心掛けていた。欧米思想を教えることによって女性の教養を高めようと考えていたからである。その理由について、次のように述べている¹⁾。

私たちは学校で英語・英文学を教育内容の中心においた。英語・英文学は日常生活や、特に商業取引に役に立つのだけではなく、西洋の言語を学ぶことは東洋の我々に西洋の思想を理解できる鍵を与えてくれる。(中略＝引用者)英文学は私たちが学ぶに値する財産であり、その思想は非常に幅広く、知覚を与えるものである。多くの思想はそのまま翻訳できないため、日本語訳を読むだけでは不十分であり、それらの思想は外国語の知識を通じてのみ習得可能である。英文学は今の日本の形成にも大きく関係しており、私たちを最高の倫理的思想と教えへと導くであろう。

津田にとって英語教育とは、より高度な知識や倫理を獲得するための手段なのであった。英語は当時においてすでに世界的言語の位置にあり、世界の

具体的には、毎週金曜日は午後3時より1時間アリス・ベーコンの「時事問答」があった。また、創立当初より隔週に巖本善治の講演があった。演題は「自修鍛錬」、「愛は比礼を行わず」、「時機」、「福沢先生の瘦我慢の説について」などであった⁴。次によく講演を行ったのは、新渡戸稲造であった。たとえば、新渡戸は同塾創立翌年の1901(明治34)年2月から「仏国婦人につきて」や自らの著書『武士道』の3回連続講演を行っている⁵。

そのほか、女子高等師範学校教授下田次郎による講演が1906(明治39)年6月27日に、ミセス・プラオンの整理衛生に関する講演が1907(明治40)年2月6日、20日に行われており⁶、さらに1911(明治44)年9月にはジョルダン博士による「フレンドシップ」という講演会が行われていることが確認できる⁷。同塾の日誌を辿っていくと、このような講演が数え切れないほど行われていたことがわかる。

また、課外授業として、C.F.マッカダムの言語学や会話、ミス・バラードの課外英語、ミス・マッカダムの英語の講演、ミス・ソートーンの聖書講義、土曜日のD.C.グリーンの唱歌指導などがあり⁸、同塾では課外授業も非常に充実していた。そして、生徒の発起で毎月1回文学会が行われていた。

このように、さまざまな講師による課外講演が積極的に行われており、学生はあらゆる事物についての見聞を広める多くの機会を与えられた。幅広い見識を養う上で、この課外講演が学生に与えた影響は大きく、津田もまたオールラウンドな女性の一要素として課外講演の教育的効果を重要視していた。

¹ 「Teaching in Japan」*The Bryn Mawr Alumnae Quarterly*, 1907年、8月『津田梅子文書』、pp92～99

² 女子英学塾同窓会『会報』第一号、英文、pp3～4

³ 『津田塾オーラル・ヒストリー・シリーズ 卒業生に聞く』第1号、津田塾大学、1980年、p12

⁴ 津田塾大学編『津田塾六十年史』、1960年、p70

⁵ 『津田塾大学一〇〇年史』、津田塾大学、2003年、p73

⁶ 女子英学塾同窓会『会報』3号、1907年、日本文、pp1～3

⁷ 女子英学塾同窓会『会報』8号、1911年12月、日本文、pp10～12

⁸ 『津田塾大学一〇〇年史』、p73

福島県尋常中学校の出京病について

こみやま みちお
小宮山 道夫(広島大学)

『扶養の花』第4号(明治23年7月15日発行)に難病「出京病」に関する投稿がある。『扶養の花』社友・会陽半狂なる人物の文章であるが、これを紹介しておきたい(13～17頁所収)。

出京病

社友 会陽半狂

世の中の病数は四百四個と思の外、茲に一種不可思議なる病があつて都合で四百五個となるかと思ふ、さて其病名はと申せば出京病となん申す病である、尤も「インフルエンザ」の如く伝染の度は烈しくない、貴顕賤民何でも遁せずと云ふではない、多く書生社会に流行するのである、伝染の度は低いが其病症は中々劇しい往々終生を誤ることがある、其流行の期節は学年の終りと夏期休業の時にあると思ふ

余が在学中一度大に流行したことがある、即ち学制変更の時にあつたのです、一人が学校を半途にして出京致しました、次で又一人が出京致しました、二人三人と、伝染また伝染して、其数が非常に増加した、其後毎年此季節に多少流行があつたです、夫れ故誰言ふとなく、出京することを目して出京病と名付けたです、

「出京」の熱を伝染病になぞらえて表現し、感染力は低いが「終生を誤ることがある」ほど激烈な病気で、学期の区切りに発生するとのことである。筆者の在学中にも流行したそうで、「学制変更の時」とあるのでおそらく中学校令の施行を受けて「福島尋常中学校」と改称した明治19年(1886年)8月の時だろうと思われる。あるいは翌年3月の福島県尋常中学校への改称の時か、はたまた安積郡に移転を完了した明治22年3月の時のことだろうか。ちなみに『福島県尋常中学校第二三年報』(明治20年4月)によれば、19年7月の生徒現員は148人、前年に比べて104人が増加し、22人が退学により減つ

た結果であった。退学者の内訳は、10人の理由が貧困、4人が「他ノ学校ニ志願」のため、8人が父兄の転居によるものであった。この数値と比べると、筆者の記述と一致するようにも思える。

そしてその翌年はまさに流行病のごとく退学者が激増する。『福島県尋常中学校第四年報』(明治21年4月)によれば55人が退学し、うち33人が「東京若クハ仙台等へ遊学ヲ為スニ因ル」退学、1人が「第二高等中学校へ入リタル」ための退学であった。その翌年は38人が退学、うち「東京へ遊学スルモノ」9人、「第二高等中学校へ入リタルモノ」4人(『福島県尋常中学校第五年報』(明治22年4月))と10人規模に落ち着いた。明治23年は「東京へ遊学スル者」6人、「第二高等中学校へ入リタル者」9人(『福島県尋常中学校第六年報』(明治23年4月))、明治24年は「東京へ遊学スル者」6人、「第二高等中学校へ志願セル者」4人となっている。

扱て此病に取付かれ出京した人が、其後の方向は如何であるか、果して能く孳々として学事に目を晒らし居る人がありますか、果たして能く確とした学校で勉強しつつある人がありますか(中には無きにしもあらず)、其多分は如何でしょう、其人々が学校を去つて出京するの時、念頭に浮出たる考は、浮き雲であつた、蜃気楼であつた、消失せぬ、今尚ほ分別がつかず五里霧中に彷徨しつつ、あたら貴重の光陰一再び得へからざる出た有為の時期しを徒費しつつあるものが多い、夫れ故此病は終世を誤る程の劇症だと申すのである、

さて此病根を探らば、先づ次の如き個条に過ぎまいと思ふ、

- 一 学校に飽きが来ること
- 二 試験成績が不十分なる為め、いらぬ教員に不平を鳴らすもの、
- 三 社会は活物である、緩慢すべき時でない、東京は學術の淵藪である、茲に学ばんは迂遠の至り、寧ろ彼に学ばん方反て望を達するに近か路である

筆者は東京遊学のため退学した者たちが順調にその志を遂げているかというそのようなことはなく、福島県尋常中学校に止まった方が良いと説く。そして出京病の原因たる3要因を指して以下のとおり論じるのである。

以上の病根は、実に誤たる考だと申さなければならん、是より一々其誤たることを弁じましよう

第一、学校に飽が来ることの誤たることは、余が今更ら多弁を要せずとも、諸君は御承知のことと思ふ、古来の勲業偉績を成し遂げたる人物の来歴を見たならば、明瞭だろうと思ふ、凡て事を成さんと思はゞ、先づ其進むべき方向を定めねばならん、己に方向が定まつたならば、確と其心を据へて置かねばならん、只其眼光の集まる所は、最初期したる一個所に在て、泰山崩れ来るも驚かず、江河溢れ来るも恐れず、坦然自若綽として余裕あるといふ様な意気込で、一心不乱に其期する所に達しようと思懸けて居らなければならん、己に此学校に飽きますから、彼学校に行きましても、矢張飽が来るに相違ありません、そこで又他の学校に移らんか、歳月は吾人に頓着なしに過ぎ去る、斯く致して居りましたならば、一生何一つ是ぞと云ふ心の仕入が出来まい、そこで始めて目が覚める、己に遅い、早や為す有るの時期は過ぎ去つた已むことを得ません、泣き寝入りに小学授業生の免許試験でも受けて、生涯を狭き境遇で送らなければならぬ、其誤たることは火を見るより明かでしょう

第二 試験成績の悪るいのは、其原因はと反求したらば自己の怠惰より生じたと申す外なからう、如何に東京が學術の淵藪にもせよ、博士学士の掃溜にもせよ、課業に勉強せぬものに、試験成績を善くしてやることの出来る道理はない、若し夫れが出来れば、東京でなくとも、諸君が現在の学校でも出来なければならんわけです、若し教員に不平があるならば(正当の与論ならば)校長に申出で処分してもらつて宜い、与論は実に勢力がある、決して愚論となるものでない、

第三 是は少し道理あるかの如く聞ゆる、されど深夜人定まるの後、残燈影暗き処静かに之を考ふるに、受取り難き議論と思ふ、諸君の言ふ所に由れば、社会は優勝劣敗だ生存競争だ、先んずれば人を制し後るれ

ば人に制せらる、而して東京は學術の淵藪であるから、茲に学ぶと彼に学ぶとは比較にならぬ、夫れ故に出京して勉強したる方、活動の社会に勝鬨を挙ぐるに近路であると「ジロツク」然たる論鋒である、即ち近路てふことが諸君の大眼目の如く見ゆる、成程御尤も至極です、併し凡て高きに登るは必ず階段によらねばならぬことを記臆せよ

第一、第二については単純明快である。先賢偉人のように進むべき道を決め、一心不乱に取り組んでいれば学校に飽きを感じている暇もない。また成績が奮わないのは「自己の怠惰」故に過ぎない。その様な者はどこに行っても何一つ「心の仕入が出来」ないし、東京に行ったとしても成績が良くなる道理もないとのこと。学問に王道なしとはまさにこのことであろう。そしていよいよ第三への論駁にすすむ。ちなみに文中の「ジロツク」は「ロジック」の誤植であろう。

一躍龍門に登ることは実に六ヶ敷い、否な寧ろ出来ない且つ又東京は學術の淵藪なることを知ると同時に諸種の誘迷物が八方に縄張りしつつあることを記臆せねばならん、近路は実に障害物が多い、一足飛は実に危険である、成る程幾何学上三角形に於て、其二辺の和は他の一辺より大なるに相違ない、されど学の道は決して三角掟木の様な容易き道でない、之を旅行に譬ましよう、願望駅に達するには二条の道がある、丁度一条は三角形の二辺の和の如く、他の一条は他の一辺の如くである、前者を本道とし後者を近路とせん、今二人の旅行者が各路を分つて進行するとしましよう、本道を取りたるものは蕩々の道であるから歩行に左様困難を覚えぬ、近路は如何であるか路が細い、岩石は横つてある、山坂が多い、上れば下り、下れば上らなければならん、路傍の芝生が露ツポイ、刺多き荊棘が路を塞である、さて此路を通るには、生爪を剥がす、足に豆が出来る、衣裳は湿る、荊棘は鋭き棘を以て赤き白き条に顔や手足を彫刻する、さて幾多の困難を切り披ひて、漸く願望駅が見ゆる所に出ました、ところが茲に道が究まつた、前に懸崖百丈が横つて居る、見下すも恐しい、安全に願望駅に達するには、是非とも崖依いに道を取ら

なければならん、然すると迂り路になる、最初の主意に違ふ、駅は目の前にも見ゆる、気が揉める、今更ら空飛ぶ鳥が羨しくなつて来た、致し方なし、非常の勇気を奮て思ひ切て跳び下りた、ところで腰を打ち(腰位ならば幸福)一次は息絶えた、医者 of 介抱を仰がねばならん、是等に多く時を移し、漸く快方に赴き願望駅に達した頃は、彼の本道を取りたるものは、早く己に達して居る、朝来の疲労を医して居る、是に於て近か路は近路でなくなつた、迂路は迂路にあらずと言ふことが出来る、先づ此様なものである、近路千里の廻りとは真成の事実である、諸君は尚ほ迂遠だとして近路を取られますか(中学校生徒諸君中春秋に富みたる即ち中学校を卒ひ而る後に云々するも左程晩からざる年若き人々にて、中学を半途にして出京せらるゝものあるを見受くるなり、予が第三病根につき非難するは重に是等諸氏にあるなり)

第一第二第三病根を一括し、一言以て之を非難すれば転校といふことが余り宜しくない、変動は進行を妨ぐるものである

諸君は実に前途遼遠多望の人々である、諸君は第二の日本を組織すべき元素である、諸君の脳裏如何は、第二日本の盛衰如何に関する、されば諸君は玉一知識の光輝ある玉一を取らなければならん、而して崑崙万里路超々……嗚呼諸君の責任は重大である、而して諸君の旅行せらるべき路は遙である、然るを尚第一第二病根の如くにして宜しき乎、第三病根の如くに危険なる冒険者流の旅行をして宜しき乎、

今や学年も半を過ぎ、夏季休業も近きぬ、出京病は流行せざるか、諸君の身は大切であるから諸種の病を予防せらるゝと同時に此出京病にも罹らざる様、よく其病根を考えへて御用心ありたきものと思ふ諸君自愛せよ

第三の本道と近路の比喻は設定が不公平であるし、岐路にさしかかったら茨の道を行けと教え込まれた読者小宮山にとっては何とも肯んぜない苦しい論だと思うのだが、読者諸氏や如何。いずれにせよ、先輩の立場から出京病を戒めるべき現状があつたという当時の時代背景を示す貴重な一文と思われる。

どんなことが「自治ではない」とみなされたのか(16)
—東京府尋常中学学友会雑誌にみる生徒の言説(その4)—

とみおか まさる
富岡 勝 (近畿大学)

東京府尋常中学校『学友会雑誌』の学友会の自治的活動に関する生徒の言説を年代の早い順に捜しているが、第53号(1909年3月22日刊行)までをチェックすることができた。これで勝浦韮雄校長の在任期間中(1890年～1909年)の『学友会雑誌』をすべて確認したことになる。

結論から言えば、前回紹介した第25号(1898年3月25日刊行)から第53号までの記事には、学友会そのものに関する生徒の言説はほとんど見られなかった。

すでにニューズレター第11号から第14号で紹介してきたように、勝浦は学友会での諸活動を通して生徒たちが自分たちの役割や責任を果たすことで新しい時代における「社会制裁」の基礎をつくることと、生徒間および生徒・教員間を「親睦友愛」の情で結びつけることで、機械的な学校管理に陥らない「精神的訓練」を行えるようにすることを期待していた。こうした勝浦の学友会観は、学友会における生徒の活動を一種の自治的活動としてとらえ、その自治的活動が「社会制裁」や「精神的訓練」につながることを期待していたととらえることができるが、こうした勝浦の期待とぴったり重なるような生徒の言説はほとんど見られなかった。

今回チェックしたなかで勝浦の学友会観と部分的に近い内容が含まれる記事として、第42号(1903年12月24日刊行)の金井清(5年生生徒)による「校門を辞せんとするに当り敢て愚衷を述べて同窓諸君の反省を促す」を紹介する。のちに鉄道官僚を経て戦後に長野県諏訪市長となった金井清による中学卒業直前の記事である。

この記事における金井の基本的主張は、「吾校一般に運動の不振を嘆じ

是を蓋大にして元気を鼓舞し進んで社会道徳を改善し勤儉尚武の風に向はしむる唯一の道たらん事を望めり¹ということである。金井は、このなかで柔道・剣道と野球を特に奨励すべきであると主張しているが、柔道・剣道の意義を「単独にて相対するを以て独立強固にして堅忍不拔なる意志を養ひ」²と述べるとともに、野球の意義を「数人共に働くを以て共同一致の志想を生ぜしむ」としている。つまり学友会の活動として野球が盛んになることによって「共同一致の志想」³が生ずることをプラスの価値として金井が捉えていることがわかる。こうしたとらえ方は、勝浦が期待した学友会の活動を通じた「親睦友情」から機械的でない「精神的訓練」という考え方と少しだけ似ているように思われる。

また、この記事の末尾では以下のように述べ、地方の中学校では寄宿舎が設けられることが多いため、生徒相互の結び付きが東京府尋常中学校に比べて非常に強いと指摘している。

彼等は多く寄宿寮を有するが故に満校の生徒互に気脈相疏し靄然たる一家族の如きもの少なからず、是を人員のみ多くして同級生の姓名だに知らず同じ学窓に同じ課業を授けられ乍ら卒業する迄曾て一回も言を交へずして相別むるのと比べては雲泥の差も畜ならず⁴

こうした指摘も、「親睦友情」からの「精神的訓練」と部分的に重なっているかもしれない。ただし金井は学友会における運動競技そのものの意義を述べているだけに過ぎず、生徒たちが学友会の運営活動を通して役割を自主的に担い、責任を果たしていくことの教育的意義については何ら触れていない。

東京府尋常中学校の学友会は、校長が会長を、各部の部長は教員が務めていたが、やはり実質的活動は委員の生徒が担っている部分が大きかったのではないかと想像される。しかし、それに関わらず学友会における競技

そのものでなく、学友会の運営を生徒たちが実質的に支えていくこと自体の意義については、勝浦の見解とは異なり、生徒たちは少なくとも『学友会雑誌』の記事を見る限りほとんど触れていない。こうした状況は、校長も生徒たちも共に生徒の「自治」を重視していた松本中学校の状況とは大きく異なっていたと指摘できるだろう。

次号では、1909年(明治42)に東京府尋常中学校の新しい校長に就任した川田正澂の学友会観を検討してみたい。

¹ 『学友会雑誌』東京府尋常中学校学友会、第42号、1903年12月24日刊行、10頁。

² 同前掲書、8頁。

³ 同前掲書、8頁。

⁴ 同前掲書、12頁。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

- 1.(目的)広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
- 2.(記事のテーマ)記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
- 3.(刊行頻度・期間)研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
- 4.(編集委員会・編集世話人)発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
- 5.(執筆者)執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
- 6.(記事の責任)記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごまねに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
- 7.(記事の種類・分量)記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
- 8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
- 9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
- 10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
- 11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

詩人茨木のり子さん(1926～2006年)の詩「自分の感受性くらい」(1977年)「倚りかからず」(1999年)を読んでいて、今の自分自身になんとか喝がはいった!気がします。「自分の感受性くらい…ひとのせいにはするなみずから水やりを怠っておいて…そもそもが ひよわな志にすぎなかった駄目なことの一切を 時代のせいにはするな わずかに光る尊厳の放棄 自分の感受性くらい 自分で守れ ばかもものよ」「倚りかからず もはやできあいの思想には倚りかかりたくない…もはや できあいの学問には倚りかかりたくない もはや いかなる権威にも倚りかかりたくはない…じぶんの耳目 じぶんの二本足のみで立っていて なに不都合のことやある…」。

(谷本)

6月11日、12日に立命館大学大阪いばらきキャンパスで第38回大学教育学会に参加しました。「伸びる大学の教育力—成果を出せる大学にはどのような教育力が必要なのか—」というテーマのもとで、シンポジウムや個々の発表を聞くことができてたいへん充実した時間でした。学生をどう育てるのか。大学教育ではどのような力を習得することが必要なのか。いろいろと考えることができました。(山本剛)

5月末、明治神宮球場で開催された早慶戦を、早稲田大学側で観戦してきました。早慶戦と言えば勝敗もさることながら、有名なはその応援合戦。応援団員の「学生注目!」の掛け声に、「何だ～!」「そうだ～!」という何ともノリの良い掛け声で応える観戦学生の姿は、心地よいものです。点数が入れば、おなじみの応援歌「紺碧の空」を肩を組んで叫ぶように歌う。応援活動と学生共同体の関係について、さまざまな視点を得ることができました。(金澤)

首都圏は水不足のようですが、西日本では人的被害や交通機能を麻痺させるほどの大雨が続いています(あ、こう書いてしまうと今号の締切を守れなかったことがバレバレですね)。休講通知が大学の電子掲示板や構内放送を賑わしています。聞くとところによると休講の知らせを聞いて学生からの歓声が

上がった教室があるとか。補講をしなければいけないのにねえ。お互いに大変。。。朝三暮四の言葉がよぎります。考えてみれば某都知事の引きずり下ろしや、英国のBrexit国民投票など、いずれも後先を十分に説明したり考えたりしているのか？と不安に思う結果が次々出ていますね。なんとも。それはそうと既に補講予定日2日間分をほぼ消費した所属校の第2ターム、いったいどうなってしまうのでしょうか。(小宮山)

先日、教職大学院の特別活動に関する授業で、10年ほど前に書いた京都の新制高校での生徒会の発足に関する論文の内容を、授業実践力をテーマとする院生諸君に聞いてもらいました。久しぶりに自論文を読み直したのですが、それまでの授業で院生諸君と話し合ってきた内容と問題関心が重なる部分がいくらかありました。このとき助言をしてくれた研究の先輩がたに改めて感謝しました。(富岡)

本ニュースレターを印刷される場合、Adobe Reader などの「小冊子印刷」機能を使って A4 サイズ両面刷りにすれば、ちょうど A5 サイズの小冊子になります。